

鯨岡峻による「接面」の人間学における 間主観的な理解の非対称性

安部 高太朗¹⁾ 吉田 直哉²⁾

¹⁾ 郡山女子大学短期大学部

²⁾ 大阪府立大学大学院

Asymmetry of Intersubjective Understanding in Humanities of “Interface with Child” by KUJIRAOKA Takashi

Abe Kotaro¹⁾ Yoshida Naoya¹⁾

¹⁾ Koriyama Women's College

²⁾ Osaka Prefecture University

Abstract : This paper attempts to clarify the asymmetry of intersubjective understanding in humanities of “interface with child” by KUJIRAOKA Takashi. Kujiraoka calls a particular emotional relationship between two persons “*Setsu-men*” (interface), the space in which they can understand each other. It is the key for Kujiraoka’s humanities of “interface with child” to understand intersubjectively between two persons. Sticking out the “tongue of emotion” is a metaphorical phrase expressing this particular intersubjective understanding between two people. However, in the relationship between a child and a child caregiver, it is emphasized and essential only for the latter to stick out his/her “tongue of emotion” toward the child. Kujiraoka does not refer to another aspect of intersubjective understanding: a child who is sticking out his/her “tongue of emotion” toward the child caregiver. There is asymmetry of understanding others or of the relationship between child and child caregivers: intersubjective understanding between the two is not intersubjective. After all, it is a huge mistake to think that we can perceive others’ emotions naturally and correctly by “tongue of emotion.”

Key Words : Relation between Child and Child Caregiver, Life Cycle, “Tongue of Emotion”, Maurice Merleau-Ponty, HIROMATSU Wataru

抄録 : 本稿は、鯨岡峻による「接面」の人間学において「間主観的」とされる理解が非対称であることを示す。鯨岡は、気持ちを向け合う二人のあいだに生まれる独特の心理的なトポスを「接面」と呼び、この「接面」で生じる現象の人間学的探究を試みた。「接面」の人間学の鍵となるのは、二者関係において間主観的に相手が分かるということである。鯨岡は、二者関係において相手の情動が伝わってくることに着目し、その現象を「情動の舌」というメタファーで語っている。但し、この「情動の舌」が伸びることは、実のところ、一方から他方への一方向的な他者理解である点で非対称的である。保育者－子ども関係においては、保育者による子どもの理解という側面のみを語っており、子どもによる保育者の理解について鯨岡は言及していない。さらに「情動の舌」で相手の情動が分かることは相手の情動が自然と伝わり、間違えることなく分かると考えられている点が独断的である。

キーワード : 保育関係、世代間循環、「情動の舌」、モーリス・メルロ＝ポンティ、廣松渉

1. はじめに

本稿の目的は、鯨岡峻の「接面」の人間学において語られる保育関係が、〈育てる者－育てられる者〉という親密な関係を前提としたものであることを確認したうえで、〈育てる者〉としての保育者が、〈育てられる者〉としての子どもを理解しようとする際に生じる認識論的問題を示すことである。本稿が試みるのは、〈保育者－子ども〉関係における相互理解は成立しうるのか、保育者が子どものことを「分かる」とはどのようなことだと鯨岡は見なしているのかについて、彼の議論に即して明らかにすることである。

本稿が鯨岡の「接面」の人間学に着目するのは、保育実践の前提として子ども理解が必須のものとして求められているからである。そこで言われる子ども理解は、保育者によってなされる子どもの内面への理解であり、あくまでも〈保育者→子ども〉という一方の理解が強く求められているという点で非対称的（一方向的）なものである。例えば、『保育学用語辞典』（2019年）では、子ども理解のためのアプローチとして「共感的理解」（empathic understanding）が挙げられている。この「共感的理解」とは「共感性に基づく他者理解」であり、「共感性とは、自分が他者の立場に立って、その人の感情を推測し、同様の感情を共有しようとするプロセスからなる」と説明されている（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 編著 2019：85）。加えて「保育においては、大人である保育者と幼児の感じ方、見方、考え方には大きな違いがあることを踏まえ、幼児が今何を感じ考えているのか、幼児の視点からその内面世界をとらえようとする」とともに、保育者の共感的理解が幼児に伝わっていることも重要であると強調されている（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 編著 2019：86）。ここでは幼児の内面世界をとらえるために、外面的な情報（視線、表情、身体の動きなど）を通して「内面世界を推測し、再構成する努力」が保育者の側だけに求められているのであり、「共感」の一方の当事者であるはずの子どもの位置づけについての記述は一切ない（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 編著 2019：85）。このように保育における子ども理解では、保育者（大人）から対象（子ども）の内面、

つまり、心情を一方向的に理解することに重きが置かれてきている。

鯨岡は、こうした保育の前提にある他者（の心情）理解が生じることを、〈保育者－子ども〉の「接面」の形成として見ている。本稿が、鯨岡の「接面」の人間学において主題的に語られる〈保育者－子ども〉関係に着目するのは、保育における他者理解、保育の前提として子ども理解を当然視している現状について、別の視角から考察することに資すると考えられるからである。すなわち、鯨岡に着目することは、〈保育者－子ども〉関係における相互理解は成立しうるのか、あるいは、保育者が子どものことを「分かる」ことができるかと確信することにはいかなる意味があるのか、を問うことにつながっていく。

本稿に先んじて、鯨岡に言及した研究はいくつかあるが、それらの多くは鯨岡が提唱した対人実践についての質的記録である「エピソード記述」に関するものである。例えば、村井尚子は、「保育研究においてはエピソード記述の実践が子ども理解の方途として近年盛んに行われるようになった」契機として鯨岡の議論を挙げている（村井 2015：186）。村井によれば、鯨岡は、保育や教育、看護などの現場への質的アプローチ方法の一環としての「エピソード記述」という技法を開発したとされ、保育研究への質的方法論の導入を行った人物とされる（村井 2015：186）。

林悠子は、当事者研究として自らの保育記録を分析する際の視角として鯨岡を参照し、子どもと自身の関係性を「間主観的な関係」だったとする。そして、その関係性において、鯨岡が言うような「他者の感情が自己に移入してくる、あるいは自己が他者におのれを重ね合わせ（成りこみ）そこにおいて他者の感情が把握される」ことが生じたという（林 2009：47）。この他にも、観察記録の分析視角として鯨岡を援用したものとしては、中津・新堀（2013）などがある。

先行研究において鯨岡は、保育者の立場から子どもを「間主観的」に理解しようというテーゼを打ち出し、その「間主観的」な理解をつづる「エピソード記述」という技法論を提案した人物として言及されている。しかしながら、「間主観的」な理解とは、理解における〈主観／客観〉という二項対立を超克

して、〈主観／客観〉を止揚した一体的な関係性において生じる（相互の）理解であるはずである。それにもかかわらず、現在の主導的な保育学言説においては、保育者が（一方向的に、非対称的に）行う子ども理解の技法ないし根拠として、鯨岡が援用されていることは、本来不自然なことのはずである。鯨岡のいう「間主観的」な理解と、保育学言説のいう「子ども理解」との異同についての検討は、先行研究においては一切行われていない。

一方で、鯨岡の「間主観的」な理解が有する「情動通底性」という前提がもつ問題を指摘した研究もある。大塚類は、鯨岡について「個や主体として子どもを捉え、子どもと養育者を繋ぐ情動や感情の絆を捉えながらも、関係発達という観点から、子どもの自我や、子どもと養育者の情動の絆や、両者の一体的な関係さえもが、養育者の傾倒的な関与も含めた子ども－養育者関係のなかで育まれる、という立場を明確にしている」（大塚 2007：320）としたうえで、「鯨岡においては、子どもや養育者が、情動通底性を介して情動を共有し合っていることを、経験的な観点から描き出せても、例えば、情動通底性を両者が生きられるのはどうしてなのか、子どもは情動通底性をどのようにじぶんのものとしていくのかが、明らかにされていない」と批判している（大塚 2007：320、傍点引用者）。本稿の問題関心は、この大塚による批判に通じるものであると言える。すなわち大塚の言う「情動通底性」（本稿で「間主観性」と言われるものに相当）が、子どもと養育者の「両者」の間に「通底」するものとして成立するその機序についての鯨岡の説明の不十分さについて検討することが、本稿の主題である。それは、鯨岡が『「接面」の人間学』の一領域と見なしている保育学研究の分野で、子ども理解の理論的背景、あるいは典拠として、鯨岡による子どもへの「間主観的」な理解が言及され続けていることの問題性を照射することになるだろう。

2. 「接面」の人間学の構想：客観科学に対する忌避から

（1）「接面」の人間学の定義

鯨岡は、「気持ちを向け合う二人のあいだに生まれる独特の空間」としての「接面」において生じる

現象を探究する領域を、『「接面」の人間学』と呼ぶ。それは、「接面で生じていることを取りあげることを通して、人間の生き様を多方面にわたって明らかにし、そのことを通して人が生きるということの意味を掘り下げることを目指す研究領域の総称」であり（鯨岡 2016：153）、これを「客観科学」と対比している（鯨岡 2016：141ff.）。彼が「接面」の人間学と客観科学とを対比するのは、客観科学では人と人とが関わり合う具体的な様相を記述し、探究することは不可能だと見ているからである。人と人との間に生じる情動が交錯する場としての「接面」に焦点が当てられているのは、これまでの第三者としての観察者の立場に固執する客観科学では、こうした人と人との情動の交錯という現象をうまく記述できないという確信が鯨岡にあったからだろう。

鯨岡の言う「接面」の人間学の対象である人間は、「自己充実欲求と繋合希求欲求という二つの根源的かつ両義的な欲求」を持っており、その充足を求めるとともに、「周囲他者との動的関係性のなかで時間軸に沿って変容し続ける存在」だとされる（鯨岡 2018：4f.）。「接面」の人間学が目指したのは、周囲の人々の中で生きており、また生きていかざるをえない人間が、周囲の人々とどのように関係性を取り持ち、関係性を変容させていく中で人間自身も変わっていくのかを具体的に見ていくことである。

（2）「接面」における二者関係の内閉性

鯨岡は、「接面」を「気持ちを向け合う二人のあいだに生まれる独特の空間」とし、「二人のあいだの物理的な空間という意味ではなく、少なくとも一方が『いま、ここ』において相手に気持ちを向けているときに成り立つ空間ないし『あいだ性』を意味する」とし、その心理的トポスとしての性格を強調している（鯨岡 2018：7）。加えて、鯨岡は、「接面」のもつ当事者性を強調しており、「接面で生じていることはその接面の外にいる第三者には接近できないものであり、それゆえ客観的にそこにあるという形で証拠立てて示すことができない」（鯨岡 2018：7）という排他性、あるいは内閉性を特色とする。それゆえ、鯨岡のいう「接面」の人間学は、あくまで当事者同士の自他融合的な時空間に生じ、そこにおいて当事者のみに感じられる現象を対象とし、そ

の意味を解釈することによって進展していくことになる。確かに、鯨岡は、「接面」のでき方が人と場合によって異なりうる可能性を認識してはいるものの、いくつかの「接面」が、同一の相手に対して複数構成されるという事態は想定していないようである。言い換えれば、一人の間に対する「接面」はあくまで一つだけなのであり、その「接面」が別様もありうるというのは、あくまで可能性でしかありえないということである。鯨岡はこう述べている（鯨岡 2016：124）。

情動が行き交い、心の動きが行き交う独特の場（空間）を一般的に「接面」と呼ぶのだと言いつつも、その内実は同じ人においても場面によってその都度微妙に異なり、また人によって微妙に異なることを認めなければなりません。そして、接面のつくられ方が人によって多様であるということは、「養護の動き」や「受け止める」ことの中身が人によって微妙に異なることに通じています。

このような排他的・特権的關係性としての「接面」を重視するアプローチを保育において採用するならば（現に鯨岡はそうすることを試みている）、「接面」の保育学は、当事者同士の融即的な自他未分化（あるいは不可分）の關係性を前提としており、〈我－汝〉関係ともいべき緊密な二者の關係性、あるいは〈我〉に対して〈汝〉すらも析出される以前の原初的な一人称的關係性を規範化することになる。鯨岡によれば、「接面」の人間学の特長は、〈いま、ここ〉で起きている「育てる」「保育する」という動態を捉えられることだとされる。つまり、「接面」として捉えられる關係性は、常に変動しつつあることをその本質としており、その關係性の変動も、当事者においてしか感知しえないと鯨岡は考えているのである。

（3）世代間の關係発達の中に組み込まれた保育關係

保育を動的な關係性の下で生じるとする見方は、鯨岡が、子どもの発達を単に個体の発達としてではなく、世代間の關係の発達として捉えていることと関連する。鯨岡において、人間（子ども）の発達は、

世代間の〈育てられる者〉から〈育てる者〉へと、つまり、子がいつしか親へと変貌することを軸とした動的な過程としての關係性の変容そのものだと認識されている（cf. 鯨岡 2002）。それは、何かができるようになるとか、何かが分かるようになることを指標として個々の能力の発達によって人間の発達を語ろうとするのではなく、他者への関わり方が変化する、言い換えれば他者との關係性の変容すること、その人の存在が〈育てる者〉へと緩やかに変化していく長期スパンの出来事として人間の発達を捉えようとするものである。

鯨岡において、保育は、かつて〈育てられる者〉だったが、〈育てる者〉の側にいつの間にか参入した親以外の大人（鯨岡の言う「広義の育てる者」＝保育者）が、〈育てられる者〉である子どもに関わる営みである。つまり、鯨岡にとっての保育は、世代間交流におけるアクターの変容と、交流における役割の変容と転換を意味している。それゆえに、鯨岡においては、（広義の〈育てる者〉である保育者を含めた）養育者の子どもへの関わり方は、かつて自分が〈育てられる者〉だったころに受けたものをベースにしていると認識されている。この点に関して鯨岡はこう述べている（鯨岡 2006：25）。

最初から大人だった人は一人としてなく、養育者はみなかつては子どもでした。ですからメルロ＝ポンティの言うとおりに、養育者は目の前の子どもの姿にかつてのおのれの姿を見ずにはおれません。

鯨岡は、子どもの（人間の）発達について、世代間の命のリサイクル図式に基づく、生涯にわたる關係の発達として提起してきた（鯨岡 2002）。鯨岡にとって発達とは、「關係発達」であるし、關係発達でない発達はありえず、発達は常に他者との關係性の中で生じてくるのである。すなわち、彼は、子どもの発達を、〈育てられる者〉がいつの間にか、結婚し、親となり、〈育てる者〉へと変容していく中で生じる世代間の生命の連鎖、「命のリサイクルの過程」における關係性の発達として捉えている（鯨岡 2002：98f.）。これは「育てる－育てられる」の關係、つまり、「かつて主体として受け止められて社

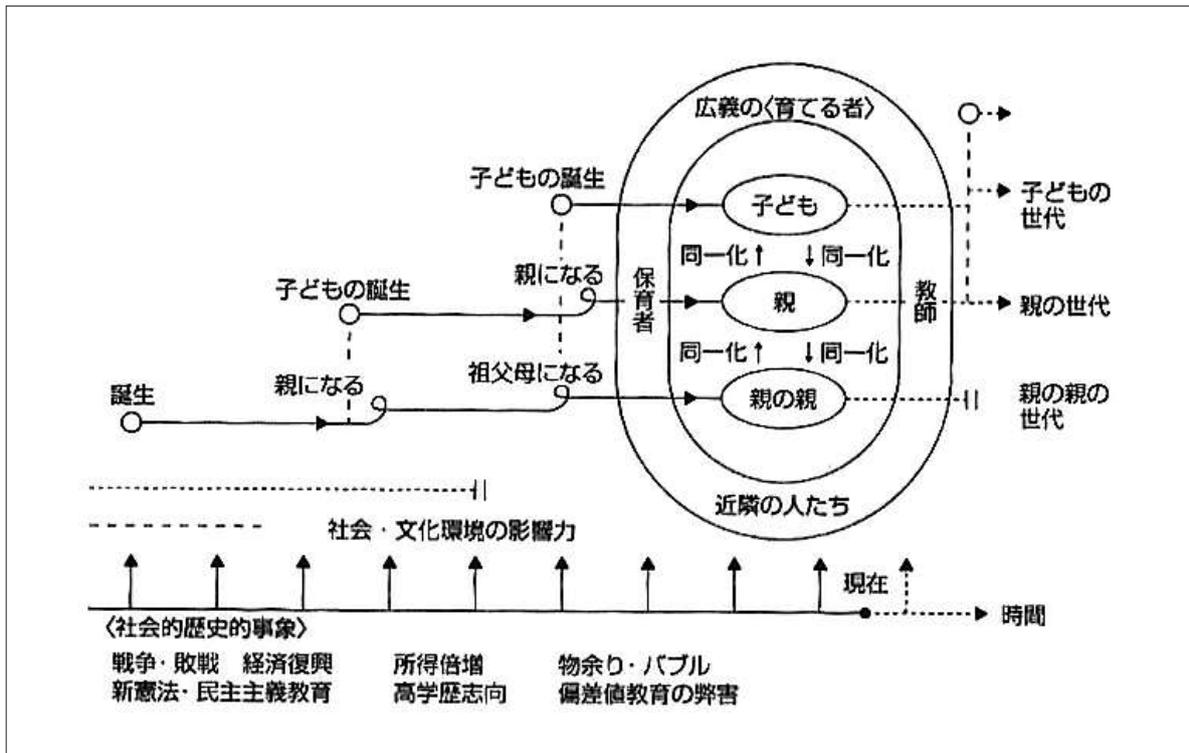


図1. 鯨岡の世代間の関係発達概念図(鯨岡 2016: 30)

会化されてきた者が次世代を一個の主体として受け止め社会化してゆくという関係が、世代から世代へと次々に引き継がれていくことを意味している」(鯨岡 2002: 99)。その後、鯨岡はライフサイクル図式において、「保育者」「教師」等を、広義の〈育てる者〉として次のように位置づけた。

上掲の図1において、〈育てられる者〉がライフステージの変化に伴って、〈育てる者〉へと相対的な役割が変遷していくことは、生涯発達として捉えられている。ただ、図1においては、広義の〈育てる者〉として「保育者」「教師」等も含み込められている点に注意しなければならない。ここで暗示されていることは、保育者や教師の役割は、「親」になることを間接的に支えることであるということと同時に、保育者や教師になるということは、自身が「親」になるという個人的な体験から切り離すことができないということである。ここで注目されるのは、鯨岡における発達、異なる世代間の関係発達を中心に語られている点である。例えば、同世代の中での発達、例えば、子どもと子どもが関わることで、子ども同士が育つ(あるいは育ち合う)という側面についての具体的な言及はなく、保育の現場においてはよく見られるはずの子ども同士の関わりをなかで子ども

が育っていくということを見失いかねない。なるほど、鯨岡自身は「時代を問わず、子どもは自分の生活の中で出会う多くの大人たちや周囲の子どもたちの影響を強く受けて、『育てられて育つ』のだと言える」と述べているものの(鯨岡 2006: 40)、「周囲の子どもたちの影響」が具体的にどのようなもので、どのような形で「育てる」ことに関わるのかは全く言及がない。

さらに、図1に示されるように、元々、鯨岡において〈育てる〉ことの範型は、「親子」関係にあるのであり、「親子」をモデルとして〈保育者-子ども〉関係も定位されている。鯨岡が、〈親-子〉関係と、〈保育者-子ども〉関係を完全に同一視しているとは言えないものの、〈親-子〉関係が、〈保育者-子ども〉関係と相似であると捉え、両者をオーバーラップさせることから、保育者の専門性を定義する際の困難が生じるだろう。というのも、親の「育て」の営みを「専門性」の発揮と捉えることはできないからである(「親であること」は保育者の「専門性」ではありえない。保育者養成においても、研修においても、「親であること」を不特定多数の人間に獲得・共有させることはできないからである)。鯨岡の議論に即して、保育者の「専門性」の熟達まで

もが異世代間の関係発達の中で生じるものだと見なすならば、そのような保育者の「専門性」の向上のための養成教育および現職研修は事実上不可能だということになってしまう。

さらに、〈親-子〉関係をベースにした世代間の発達の連鎖を、保育者にも適用して論じようとしたがために、鯨岡の『『接面』の人間学』において鍵になる「間主観的」な他者理解には重大な問題が孕まれることになった。広義の〈育てる者〉である保育者もかつて〈育てられる者〉だったがゆえに、今、目の前で関わる〈育てる者〉である子どもを「間主観的」に理解でき、それゆえ適切に関わることができるというレトリックが暗に前提されることになってしまったのである (cf. 鯨岡 2006: 6)。過去の経験に依存した関係性の構築と他者理解を論じるために、過去の経験の存在は自明視され、その経験の多様性や個々人の内面における経験受容のあり方という質的・物語的側面は一切捨象され、匿名化されてしまっている。

しかも、ここで言われる他者理解は、あくまでも〈育てる者〉による〈育てられる者〉に対する理解のみであり、鯨岡は〈育てられる者〉から〈育てる者〉への理解については、間主観性と言っておきながら一切論述していない。保育者が子どものことを「分かる」ことには重きが置かれる一方で、反対に子どもが保育者のことを「分かる」ということはそもそも問題にはならなくなっている。そのことは、保育者が子どもを「分かる」ということと、子どもが保育者を「分かる」ということの間で生じてくるはずのズレを見失っていることを意味する。保育者による子どもの理解のみが前景化し、しかもそれが恰も保育者と子どもの両方で共通に了解された相互的理解であるかのように語られる恐れがここにはある。

それと同時に、過去の個人的経験の記憶に基づいてなされる「間主観的」な理解は、個々の保育者の個人的経験が多様である以上、その理解の仕方も無限に多様であることの意味を捉えようとしていない。保育者に共通して獲得されうる「専門性」を論じようとして、保育者の単なる人間、生活者としての個別の側面のみが前面化されているのである。

客観的な行動科学による他者理解の特異性を忌避し、「人と人とが共に生きる場で起こること」を何と

か記述しようという鯨岡の努力の意義は過小評価されるべきではないが、彼の提起した「接面」の人間学が前提する「間主観的」な（他者）理解が持つ非対称性（それは非-間主観性に他ならない）から出来する問題についての検討は、丁寧に行われなければならないだろう。鯨岡に対して批判的検討を行うことは、彼が忌避する行動科学的な、客観的な他者理解への単純な回帰を志向するものではない。『『接面』の人間学』において鍵になっている「間主観的」な理解を批判的に把握することが重要なのは、それは、保育者が、保育の場で生起する出来事から、子どものことを（一方的に）理解できたかのように特権的に語ることに禁欲的・自制的になるために必要なことだからである。

3. 「情動の舌」というメタファーで語られる「間主観的」な理解

(1) 鯨岡における「間主観的」な理解の非対称性

鯨岡の『『接面』の人間学』の鍵概念である「間主観的」な理解については、元々「情動の舌」と呼ばれるメタファーで語られてきた。「情動の舌」とは、二者関係において「それぞれの情動領域（つまり気持ちや感情の動き、あるいは vitality affects など）は、自己身体領域をはみ出して相手の身体領域まで伸長することができる」ことを模式化したものである。早い時期に「情動の舌」の概念が提示された著作には、次のような図が掲げられている。

この図2は、(A) から (E) へと、まず先に、大人の側から「情動の舌」が伸びて、その「舌」が子どもの情動領域に到達したのちに、子どもの側から「情動の舌」が大人に対して伸び始め、最終的に相互に「情動の舌」が「主観性の領域」に到達し合うに至る過程を理念的に表している。鯨岡は「二者のあいだに関係が築き上げられていく上で、一方または双方が相手の気持ちをもち出すことが重要な意味」を持つとし、これによって「相手の気持ちが分かる、相手の感情の動きが掴めるようになる」という（鯨岡 1997: 183 傍点引用者）。ここで鯨岡が「一方」が気持ちを「もち出」しさえすれば、二者間の関係性が形成されうるとしている点には注意すべきである。つまり、ここでは、保育者の側から一方的に気持ちが持ち出され（つまり一方からの「情

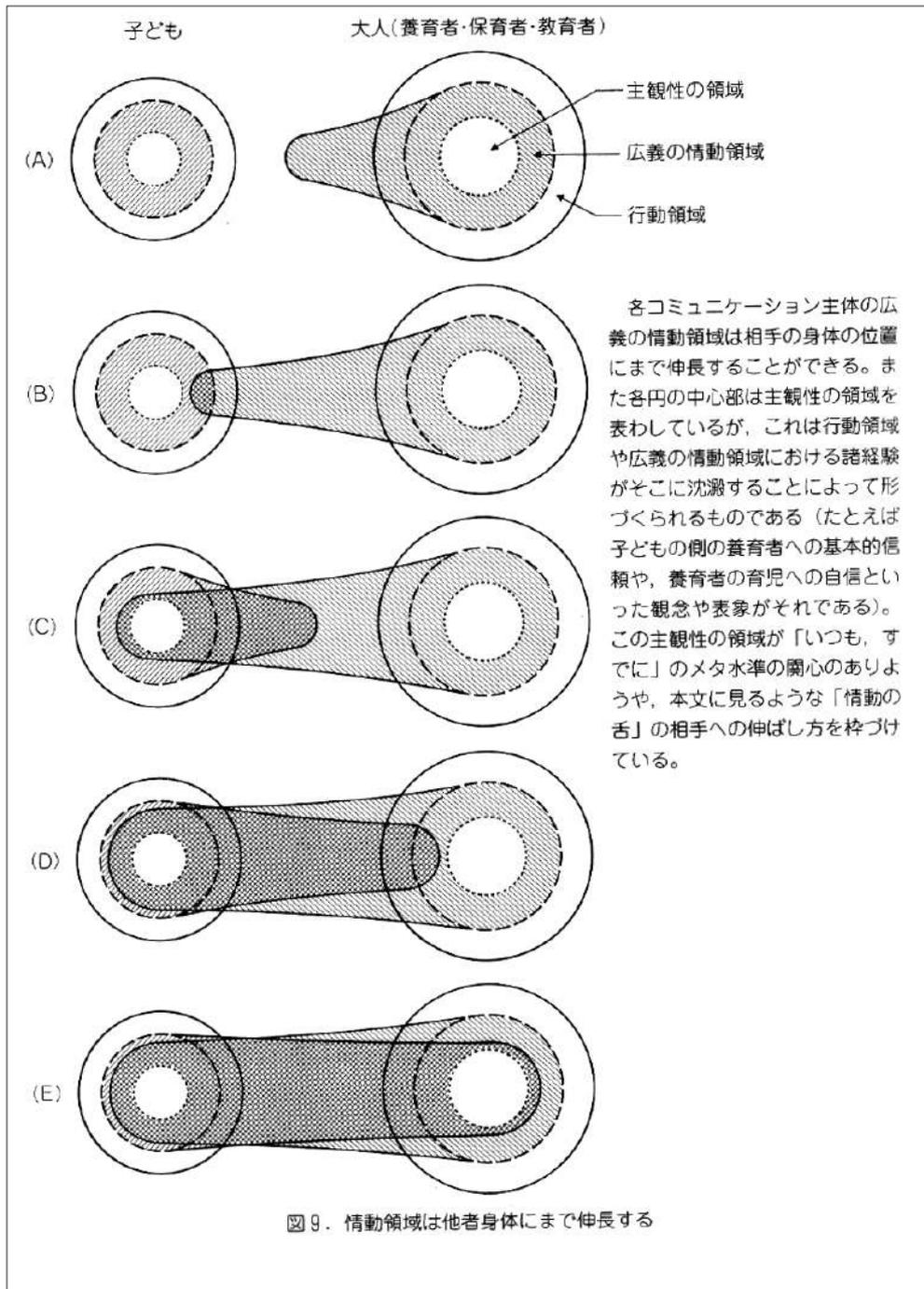


図2. 保育者-子ども関係における「情動の舌」(鯨岡 1997: 184)

動の舌」が伸ばされ)ることによって、子どもと保育者との間に関係性が成立し、少なくとも保育者の側からは子どもの「感情の動き」を恰も「掴む」というように、身体的実感を有しながら理解することが可能になるとされているのである。さらに(保育者も含む)養育者と子どもの関係については次のように述べている(鯨岡 1997: 183 傍点・[] 内引用者)。

とりわけ乳児とその養育者の関係にあっては、まず最初に養育者の側が気持ちを持ち出すことによって乳児の気持ちの動きを掴み、それに従って具体的な関与が生み出され、そのときに生じる養育者自身の満足や喜びの感情の中に乳児が浸しこまれていました。そこに養育者の「成り込み」[養育者が子どもの立場に成り込むこと]が生じていることもすでに指摘したところです。

そのうえで、鯨岡は、先に掲げた図2の「情動の舌」を、マルクス思想の再興を図った哲学者である廣松渉の「自我の膨縮」という考えをヒントにして図式化したと述べている（鯨岡 1997：183）。上記引用において傍点を付して強調した通り、鯨岡自身が「情動の舌」のアイデアを提起し始めた当初においては、「間主観的」な理解について、両者の間の動きの始まりには前後関係があること、つまり「間主観的」と言っておきながらも、その間主観性の発端は、相互的・同時進行的な交絡ではなく、〈（認識するところの）主体－（認識されるところの）客体〉という非対称な関係性を前提としており、保育者の側からの先制的な働きかけを特別視していた。「情動の舌」の相互伸張を介するはずの「間主観的」な理解は、その初発の時点においては相互作用的なものではない場合がありうるのである。

さらに、養育者（保育者）による子どもの理解という側面については強調される一方で、他方、子どもによる養育者の理解という側面についてはほとんど言及されていないため、「間主観的」な理解が生じる〈養育者（保育者）－子ども〉関係は、「間主観的」と言いながら、保育者による一方向的な理解（という確信）に依拠するものになりうる危険性を排除できない。

加えて、「廣松の『自我の膨縮』という考えをヒントにして図式化した」という割には、鯨岡は、廣松が『世界の共同主観的存在構造』において示した主題である「共同主観性の存在論的な基礎づけ」、〈主体／客体〉区分の乗り越えという課題を無視してしまっている。廣松は、『能知的主体』[認識主体たる人の精神]と『所知的客体』[認識対象たるモノ]とを存在的に截断すること」の問題性を指摘している（廣松 2017：212 [] 内引用者）。例えば、廣松が、掌を合わせた状態の、右手による左手の触知は、同様に左手による右手の触知でもあることなどについて言及するのは、能知／所知の一体不可分性の例証を挙げようとしたからであろう（廣松 2017：212ff.）。廣松は、「能知としてあるか、所知としてあるかは必ずしも排他的・非両立的ではない」と強調する（廣松 2017：213 傍点原文）。そのうえで、廣松は、実体的に自我が伸長しているわけではないが、「眼鏡や補聴器は、それを常用している人にとっ

ては、対象的存在というよりも身体的自我の一部というべき」であるというように（廣松 2017：212）、モノの機能を介して身体的自我が伸長したり、逆に収縮したりする事態を「身体的自我の膨縮」と呼んでいる。眼が悪い人にとっての眼鏡、耳が悪い人にとっての補聴器が、それを常用する人にとっては身体の一部と認識されることは身体の膨張であり、逆に麻痺した腕が（生理的には身体の一部であるにしても）、恰も身体から切り離された対象物であるかのように認識されることは、身体の収縮といえるだろう。この「身体的自我の膨縮」は、あくまで「その都度の機能的・聯関性において存立する」とされている（廣松 2017：218）。

廣松において、人が近傍のモノと結び合う連関性の認識こそが世界認識の態様であるとされていることと、鯨岡において、一方の人が、他方の人と結び合おうとする繋合欲求が人間存在の本質だとすることの間には巨大な空隙が存しているよう。

鯨岡においては、「情動の舌」という「情動領域」が取り上げられているに過ぎないから、廣松の「身体膨縮」という肉体的メタファーを鯨岡が取り上げるのは適切でないように思える。加えて、鯨岡においては、「情動の舌」はあくまでも膨張・伸長する側面のみが強調され、収縮・退縮する側面については限定的に言及されるのみである（鯨岡 2006：169）。すなわち、「情動の舌」の相互的交錯が成ったのち、どちらかの「情動の舌」が収縮・退縮して、相手の「情動領域」が再び感知されなくなるような事態については具体的に言及されていない。鯨岡においては、廣松による「主客の二項対立の超克」という関係論的認識論上のモチーフが見失われ、主客の融合というロマン主義的な図式の中に、廣松のアイデアが押し込められているのである。

（2）「接面」における「間主観的」な理解の非意図性・不可疑性

鯨岡によって「接面」概念が導かれるプロセスで焦点化されたのが、上述の通りの、相手のことが「間主観的に分かる」ということだった（鯨岡 2016：32ff.）。「接面」をより鮮明なイメージによって表現したのが、上記の「情動の舌」という比喩だったといえる。「舌」が他者の主観性の領域に接

する面、つまり「舌」が舐め、味わっている面が「接面」に相当するわけである。「舌」が、二者間の間で互いに向けられ合い、互いを舐めて味わうという状況において、「接面」は、間主観性の場として成立する。その時、「接面」とは「情動の行き交う領域」であり、その場は「相手に自分の気持ちを持ち出す」「相手の気持ちに自分の気持ちを寄り添わせる」ことによって維持される（鯨岡 2016：41）。ただ、注意しておくべきことは、ここで言われている「気持ちの寄り添わせ」を行っているのは、第一義的には保育者であるということである。鯨岡は、この「気持ちの寄り添わせ」による「接面」の成立という自説が、保育実践に持ち込まれる中で生じた「誤解」について次のように述べる。

「あなたに子どもの気持ちが掴めないのは、子どもに成り込まないからだ、子どもに情動の舌を伸ばさないからだ」というような発言がしばしば私の耳に届き、私の主張が正しく理解されていないことを思い知らされました。というのも、意識して持ち出すかどうかという議論ではなく、間主観的に分かった結果を分析的に見ればそのように言えるということに過ぎなかったからです。つまり、間主観的に分かったことを後から振り返れば、気持ちを持ち出していた、情動の舌が伸びていたということを言いたかったわけで、気持ちを意識して持ち出せば分かる、意識して情動の舌を伸ばせば分かるということではないということに注意を喚起する必要に迫られました。

（鯨岡 2016：41）

ここで鯨岡は、「相手に自分の気持ちを持ち出す」「相手の気持ちに自分の気持ちを寄り添わせる」とこと、「間主観的に分かる」ことの関連を明確に論じていない。そもそも、「間主観的に分かる」とする意識、あるいは意図は、あくまで保育者側に抱かれるものであり、それ自体は「間主観的」な意識ではありえない。とするならば、保育者が、「分かる」と意図してから、「（間主観的に）分かった」と思えるまでの間における「間主観性」の成立過程について、鯨岡は論じるべきであろう。ところが、間主観

性が成立した、ということは、当事者にとって事後的にしか感知し得ないとされ、かつ、間主観性の成立が瞬間的なものであるとされているためか、どのように間主観性が成立するに至ったのかについての論述を欠いている。「接面」が生じた（そのことは同時に「間主観的に分かる」という事態が生じたということでもある）と鯨岡がいう場合、「相手に自分の気持ちを持ち出す」「相手の気持ちに自分の気持ちを寄り添わせる」ことができた、「分かつ」としている側が事後的に見なしている（あるいはそう「評価」している）というだけである。「間主観性」というのは、当然のことながら、保育者と子どもという二つの主観の「間」に成立する場、あるいは関係性なのであるから、「間主観性」は、保育者の側からだけ成立が感じられるというものではありえない。「間主観性」が間主観的である限り、その成立は子どもにも感知されるはずであり、子どもの内的／外的活動に変容をもたらすインパクトを持ちうる。しかしながら、「間主観性」を子どもが感知（あるいは直観）するというのが、子どもにとってどういう意味を持つのかについて、鯨岡が主題的に言及していないことは奇妙というほかない。

相手を「分かつ」とする意図性は、鯨岡自身によって「情動の舌」の動きとして表現される。「情動の舌が伸びる」という表現に見られるように、鯨岡において「相手に自分の気持ちを持ち出す」「相手の気持ちに自分の気持ちを寄り添わせる」ことは直観的かつ感覚的なもの、舌にある味覚のように、口に入ったら味わわずにはいられないものとして語られている。味覚のようなものとして相手を感じるということは、相手について間違って感じるということがないということを示唆している。例えば、舌で蜂蜜を舐めたときに、「甘い」という味を感じることは当然であり、「塩辛い」「苦い」などと感じることは（味覚障害に冒されていない限り）ありえないし、同様に、「この蜂蜜は、私には甘く感じるが、実は塩辛いのかもしれない」などという疑念を抱くこともない。しかも、その味の感覚は、瞬間的に、否定しようのない実感として私たちに迫ってくる。

「間主観的」に分かるというのは、結局、「解釈」に過ぎないのではないのか、そもそも他者とは不可知の存在ではないのかという自らに突きつけられた

批判的言辞に対して、鯨岡は、目の前で乳児がむずかかって泣き喚くときに、乳児の気分が伝わってこないなどということがあろうかと感情的に反論する(鯨岡 2006:125)。この反論は、子どもが分かるということは、当然のように実現しようという彼の信念の表明であろう。

子どもが「間主観的」に分かるということを支えているのは、鯨岡によれば「身体の共鳴共振」によるという。つまり、同質の、相響きあう媒介としての「身体」を共有していることが、間主観的なわかり方を支える基層なのだという。鯨岡が、「舌」という可視的かつ器質的な、身体から伸長しうる感覚器官のメタファーによって子どもへのわかり方を説いたのは、彼にとってはきわめて自然なことであつたのだろう。

鯨岡によれば、「接面」が生じるということは、「身体」を媒介としながら、相手の気持ち、隔たりなく、即時的にこちらに流れ込んでくることであり、逆にこちらの気持ちも相手に間断なく流れ出している、身体接触—心理接触的な状態である。その点において、「舌」による「間主観的」な分かり合い方というのは、お互いにお互いを舐め合うことによって味わい合うことである。そのような、舐め合いの状態が規範化され、そこからの退出は禁じられているかのようである。つまり、そこでは、保育者が舐めたくない子どもの存在は失認されるし、保育者に舐められたくないという子どもの意思も等閑視される。鯨岡においては、「接面」をつくられることが好ましくない事態(「舌」のメタファーで言えば、子どもの「舌」が大人を「不味い」と感じる、あるいは子どもが自らを「舌」で舐め回してほしくない、あるいは自らの「舌」で舐め返したくないと感じる状況)が、〈育てる者—育てられる者〉の関係においては生じえないと考えられているようである。それゆえ、子どものことは全て「わかっている」と信じている側が本当に分かっているか否かは「反省」されない(体感、実感として身に迫ってくるわかり方なので、それが間違っているということなど想像もできないからである)。同様に、「接面」ができていないことの意識化は可能なのか、あるいは、「接面」ができていないにも関わらず、できていると勘違いする(直観する)可能性はないのか、そのことを認

識するには如何にすればよいのか——こうした問いは、「情動の舌」が伸び、舌先が相手に触れたのだ、と一方が思い込んだ(直観的に確信した)瞬間に不可視化され、関係の非対称性がせり上がってくる危険性があるのである。このような諸問題は、「間主観的」なわかり方が、技術^{テクネー}であることを否定したことから生じてきたものである。つまり、「間主観的」なわかり方を、「人間」が普遍的に備える感覚による至極当然の現象として記述してしまったので、どうすれば「間主観的」なわかり方が可能になるのか、どうすればより深い「間主観的」なわかり方に到達できるのかという問いに向き合う機縁を鯨岡は失ってしまったのである。

4. おわりに

本稿においては、保育実践において一般的な前提となっている子ども(の内面)理解の論拠とされてきた、鯨岡の「間主観的」な子ども理解の構造とその問題性について指摘した。鯨岡における「間主観的」な理解は、二者関係において一方から他方へ「情動の舌」が伸びるというメタファーで語られ、否応なしに味わわれるものとして、他者の情動が捉えられるなかで成立するとされている。但し、〈保育者—子ども〉関係にあつては、保育者による子どもへの一方向的な理解が強調されるが、逆に、子どもの側から保育者の側へ「情動の舌」が伸びるさまについて詳細に扱われることはないという点で非対称なレトリックである。

加えて、「情動の舌」が伸び、それが相手に接した瞬間に、相手の情動は「わかった」ことになってしまう。それゆえ、〈保育者—子ども〉関係における「間主観的」な理解が、保育者による子どもへの一方向的な理解に留まる、非対称的なものになる危険性を捉え損ねてしまっている。「間主観的」な理解は、〈保育者—子ども〉という閉鎖的・排他的な関係性の中で生じるものだから、その関係性の埒外にいる他者による再検討はそもそも不可能である(埒外の他者との相互検討が可能なのであれば、その理解は〈保育者—子ども〉という当事者間の「間主観性」に依拠したものではないはずだからである)。

〈保育者—子ども〉関係における「間主観的」な理解が抱える諸問題は、保育者による子どもの情動が

「わかった」という感覚を、省察的に捉え直す契機がビルトインされていないために生じてくるものである。保育者が「わかった」と思ったものが、単なる思い過ごしや誤認であったということには、保育者自身は気づきえないし、そのような間違いであるかもしれないような「わかり方」は、そもそも「間主観的」なものではないとして棄却され、否定し去られてしまうだろう。このような、保育者による子どもへの理解の不可謬化・特権化は、「子どもによる保育者理解」という反作用を論理構成の中に内在化していなかったことから生じてきているものと思われるのである。

文献

- 大塚類 (2007) 「乳幼児の意識にとっての他者関係」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻、317-326頁。
- 小倉定枝 (2013) 「保育における「主体性」言説に関する考察：1980年後を中心に」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』第9号、13-23頁。
- 鯨岡峻 (1997) 『原初的コミュニケーションの諸相』ミネルヴァ書房。
- (2002) 『〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ：関係発達の視点から』日本放送出版協会。

- (2006) 『ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性』ミネルヴァ書房。
- (2011) 『子どもは育てられて育つ：関係発達の世代間循環を考える』慶応義塾大学出版会。
- (2016) 『関係の中で人は生きる：「接面」の人間学に向けて』ミネルヴァ書房。
- (2018) 『子どもの心を育てる新保育論のために：「保育する」営みをエピソードに綴る』ミネルヴァ書房。
- 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 編著 (2019) 『保育学用語辞典』中央法規。
- 富田純喜 (2014) 「教育実践において子どもの変容といかに向き合うか：個体能力論の批判的検討から」『教育学雑誌』第50号、165-170頁。
- 中津郁子・新堀友 (2013) 「保育者の子どもへの関わりについての心理臨床的意味づけ」『鳴門教育大学研究紀要』第28巻、10-23頁。
- 林悠子 (2009) 「実践における「保育者 - 子ども関係の質」をとらえる保育者の視点：保育記録の省察から」『保育学研究』第47巻第1号、42-54頁。
- 廣松渉 (2017) 『世界の共同主観的存在構造』岩波書店。
- 村井尚子 (2015) 「エピソード記述と教育的契機の記述による教育実習へのリフレクション」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第5巻、185-194頁。

受付日：2021年3月10日

受理日：2021年5月17日

